

第8回「オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

幸せの毛布

篠本和男・大阪府

私が義母中嶋和子から聞き出した、戦中戦後の話を少しだけ語らせてください。

早くに父親を亡くした和子は、大阪府岸和田市の尋常小学校を卒業するとすぐに働きに出た。家の前の電信柱には岡田織物という会社の求人紙が貼られている。和子は迷わずこの会社で働こうと決めた。同じような境遇の同級生三人も、和ちゃんが行く会社ならとついてきた。和子は、大の負けず嫌い。陽気で、男の子みたいにサツパリしている。友だちに好かれ、頼りにされる少女だった。

昭和十五年、日中戦争さなかの暗い時代だったが、十三歳の少女たちは元氣一杯で、毎朝五時に集合し、工場までてくてく歩いた。会社は六時始まりで夜まで働いた。最初は管に糸を巻く見習いの仕事で、毛布の織子になれたのは一年半も先のことだった。

たった三十分しかなかった休憩時間。少女たちは粗末な日の丸弁当をかき込むと、紀州街道にある和菓子屋まで走って行くのが唯一の楽しみだった。きな粉餅を頬ばりながら、必死で工場へ駆け戻ったという。

人並みの織子になると、割烹着を着て、「ジャカード織機」というフランス製の大きな機械の前に立たされた。中国大陸で戦っている兵隊さんのために和子たちはそれこそ身を粉にして毛布を織り続けた。

「カチャン、カチャン」というジャカード織機独特の音でリズムをとりながら、

「お母ちゃん、給金が少なくてごめんね。来月はもっと頑張って稼ぐからね」

と病の母に心の中で詫びた。

和子の一番の親友は病弱な春子という少女だった。彼女が十歳のとき、父親が「だんじり祭り」で四トンもある地車と家の壁に挟まれて亡くなった。早くに父親を亡くした者どうしで深く心が通い合った。

昭和二十年に入るとついに配給もなくなり、春子と岸和田港まで芋の茎を持って行き、海水にひたして味付けした。塩さえもなかったのだ。お腹をすかしながらも、少女たちは波間で歌い、たわむれたという。

敗戦のあと、仲良し四人組で、給金が高いと評判の泉大津の藤井毛織を訪れ、実技試験を受けた。ジャカード織機の扱いに熟れている和子たちはすぐに採用してもらえたが、手の遅い春子だけは断られた。

「うちもみんなと毛布を織りたいねん！」

ペソをかいている春子を慰めながら和子は、苦勞をともにしてきた春子だけは絶対に見捨てるわけにはいかないと思った。

「どうしても春ちゃんと一緒に働きたいんです。駄目なら、みんなでこの会社は諦めます」懸命に頼み込んだが、社長は首を横に振るばかりだった。

しかたなく四人でとぼとぼと泉大津駅に向かって歩きはじめた。「うちのことはええから、みんな会社に戻って！」突然春子はそう叫んで道端にしゃがみ込んだ。工場長が追いかけて来たのはそのときだった。吹き出す汗を拭いながら工場長は和子に向かって念を押した。「ええな、あんたには、きつちり 一人前“働いてもらうさかいにな！”」

泉大津には風呂屋が多く、帰りがけにはゆつくり湯浴みができた。あの時代の地獄のような生活が嘘みたいだった。

いつものように湯船に浸っていたある日の夕方、無口な春子が珍しくしゃべった。そのとき言葉が和子には忘れられない。

「うちら身を削って兵隊さんのために毛布を織ってきたやろ。それが今は、家族のための毛布を織れるようになったんや。こんな幸せなことってないでなあ。うちら“幸せの毛布”を織って日本中に届けてるんやで」

それを耳にした和子もまた、「うちらの戦争は終わったんや」と感じたそうである。

二年目に和子は、『織布見廻』という指導係に昇格した。その年、商工会議所で「第一回大阪府技能競技会」が開催され、工場代表として出場した和子は優勝して表彰された。

応援に来ていた春子が自分のことのように喜んで、よそ行きの着物の袖を涙で濡らした。楽しい勤めだったが、手足をもがれるほどつらかったのは、熟練の織子に成長した春子がまだ二十六歳という若さで突然逝ってしまった夜のことだった。

あまりの哀しさのためか、その夜和子は血尿を流したという。

時が流れ、和子は九十二歳になった。

今でも時々、春子に会えると言うので私は驚いた。よく聞いてみると、夜明け前に春子が夢枕に立つというのだ。織りたての毛布を胸に抱いたおさげ髪の春子が現れて、うれしそうな顔で出来具合を見てくれと毛布を差し出すそうなのだ。

「春ちゃんだけ歳をとらんからズルい」

和子は皺だらけの顔を私に向けて微笑む。